南スラウェシ(セレベス)のイスラム改革運動研究(その2)

― 第二一回ムハマディヤ・マカッサル大会を中心として ―

利光正文

はじめに

貿易港として繁栄するマカッサルのイスラム化は一七世紀の初頭とされているが、この世紀を通じて南スラウェシ全体にイスラムが浸透し、インドネシアの中でも最もイスラム色の濃い地域となってゆく。この地にイスラムの改革運動が到来するのは二〇世紀初めのことであり、イスラム改革団体ムハマディヤが運動のイニシアティブをとる。

ムハマディヤのマカッサル支部は、一九二六年に設立される①。一九一二年、中部ジャワの古都ジョクジャカルタに、アフマド＝ダフランによって設立されたムハマディヤが、組織を拡大してゆくプロセスは、大まかに言えば次のようになる。先ず、その地にいくつかのグループなり団体が出現する。小は大に吸収され、それらはしだいに大きな組織となって行く。それとともに、運動の牽引車となる人物が現われ、組織をリードしつつ、その支持基盤の拡大を図る。こうした動きはムハマディヤ中央本部の注目するところとなり、お互いの接触が始まる。両者の理念が合致すれば、あとは支部設立のための条件作りのみとなる。こうしてムハマディヤの支部が誕生する。マカッサル支部もその例外ではなかった。

ところで、一九二六年に成立したムハマディヤ・マカッサル支部の、その後の発展はかなり順調であった。その土

地柄によるのであろうが、南スラウェシとイスラム改革運動の相性はよかったようである。各地にムハマディヤの支部やグループが生まれ、ジャワ以外の地では、ミナンカバウ（西スマトラ）②に次いでムハマディヤ勢力の強いところとなる。南スラウェシにおける初期ムハマディヤ運動のピークは、一九三二年に開かれたムハマディヤ・マカッサル大会であろう。一九一二年より毎年開かれているムハマディヤ大会③は、一九三〇年、初めてジャワ島外の地ブキティンギ（西スマトラ）で開催され、翌年、ジョクジャカルタに戻ったものの、次の年には、マカッサルで開かれた。

ムハマディヤの全国大会開催には、後述するが、その準備にかなりの時間と費用を要するようである。しかし、この大会開催には、南スラウェシのムハマディヤ会員やその支持者に大きな自信を植えつけたことも確かで、大会の成功により、マカッサルはムハマディヤの一大拠点となった。

次に南スラウェシがインドネシア人の耳目を集めたのは、一九五〇年代から六〇年代の初めにかけて、ムハマディヤの活動家カハル＝ムザッカール④によって起こされたダルル・イスラム反乱である。西ジャワ、西スマトラ、南スラウェシで起こったイスラム国家（ダルル・イスラム）樹立をめざす反乱は、独立後間もないインドネシアにとって、混乱に一そうの拍車をかけるものであったが、スカルノ政府によってすべて鎮圧され、ムザッカールも国軍により殺された。南スラウェシにおける反乱はムザッカールの個人的野心とされているが、彼がムハマディヤの会員であったために、その後のムハマディヤ運動に与えた影響も大なるものがあったようであるけれども、ここではその事件にふれる余裕がないので、いずれ稿を改めて取り扱ってみたい。

ともあれ、小稿では、第二一回ムハマディヤ・マカッサル大会開催にいたる経過、および大会の内容について述べるとともに、大会の分析を通じて、南スラウェシにおける初期ムハマディヤ運動の意味も考察する。

尚、史料上の制約もあり、必ずしも詳細な分析ができないかもしれないことを、冒頭であらかじめことわっておき

たい。

1　大会記録

ムハマディヤ大会は一九一二年の設立以来、一九四一年まで毎年開かれている。それ以後は数年おきと間隔があいてゆき、近年では一九八五年にスラカルタで第四一回目の大会が開かれるにいたった。⑤

大会に関する記録としては、ジョクジャカルタの中央本部から小冊子“Boeah Congres”が出されている。⑥しかし、これは大会のアジェンダを中心とした簡単なもので、大会で何が討論されたかは分っても、議論のなかみまでは知りえない。大会の内容については、ムハマディヤの機関誌“Soeara Muhammadijah（ムハマディヤの声）”のなかに断片的に出てくることはあっても、その詳細な部分まではなかなか知りえない。このような状況下、例外的に残されているのが、第二一回マカッサル大会の記録⑦（以下『大会記録』と略記）である。以下、主として『大会記録』に依拠しながら、マカッサル大会を概観してみたい。

2　大会開催にいたる経過

南スラウェシの中心都市マカッサルは、貿易港として繁栄を続けているが、ムハマディヤ大会が開かれる一九三二年頃の人口をみてみると、次表のようになる。約一二万の人口のうち、中国人が一割強を占めている。当時の首都バタヴィアは別格として、蘭領東インドにおける人口一〇万以上の都市一二のうちの一つにマカッサルははいっており、約一三万のジョクジャカルタやパダン（一五万）と肩を並べている。⑨マカッサルは香辛料や米、塩等の交易で栄え、華僑はあらゆる所に入りこんでいた。そして、マカッサルのもう一つの特徴は、ジャワ第二の貿易都市スラバヤとの

表1　1930年のマカッサルの人口構成

原住民	ヨーロッパ人	中国人	東洋外国人	合計
101,305	3,457	15,482	797	121,041

出所）『アジアにおける国民統合――歴史・文化・国際関係』⑧

緊密な関係であった。スラバヤとの間に定期航路が開かれ、経済や宗教（イスラム）上の交流が常に保たれていた。マカッサルは活気あふれる町であったわけである。

さて、一九二六年の支部誕生以来、南スラウェシのムハマディヤ運動の順調な発展は、ムハマディヤ会員の間に次なる目標を抱かせるようになった。ムハマディヤ大会のマカッサル市への誘致である。『大会記録』によると、マカッサルが開催地として名のりを上げたのは、ミナンカバウでの第一九回大会の時であった。ブキティンギでの大会はジャワ島外で初めてであったし、マカッサルとしても期するところがあったであろう。ソロやスマランも名のりをあげたけれども、二〇回は本部のジョクジャで、二一回はマカッサルにて⑩と決定された。「大会はすでにスマトラへ渡っているし、セレベスへも渡るべきである。」という意見が大勢を占めたためであった。この大会によってイスラム化の光が生まれ出で、セレベス島中にイスラムの光がふりそそぐであろうというのが、関係者の期待したところといえよう。

開催地決定の知らせはイスラムの雑誌〝ビンタン・イスラム（イスラムの星）〟によってインドネシア中に報道され、南スラウェシのムハマディヤ会員達は大会の準備に取りかかった。

ところで、大会当時のムハマディヤ運動の状況はどうであったのだろうか。ムハマディヤの場合、会員数がはっきりしない。本部に登録している正式の会員(anggota)とは別に、ムハマディヤに寄付したり、その行事に参加する人々（simpatisan 支持者）とム

ハマディヤの学校や病院等附属施設に属する人々（keluargabesar 大家族）も含める場合も多いので、なかなか数が分らない。それに比べて、支部数は明確である。一九三二年四月の時点で、ジャワ二二五、スマトラ一三五、セレベス二三、ボルネオ一五、その他一八で計四一六となっている。加えて、学校数三二四、教師六七二名、生徒一七、〇八一名、スラウ（イスラム塾）一〇二、モスク三八、図書館一五、事務所八一であった。[11] 支部数はスマトラと比較すると見劣りするが、スマトラはイスラム改革運動の先進地[12]であるので、致し方ない所であろう。しかしながら、設立後二〇年目のムハマディヤ運動は着実な地歩を築いたといえよう。

以上、マカッサルでムハマディヤ大会が開かれる必然性みたいなものを述べたつもりであるが、実際、マカッサルはムハマディヤ運動の重要な拠点となりつつあった。

3　大会の開催

大会開催前後、マカッサルでは、次表に見えるように多くの新聞が発行されていた。この時期はインドネシアのあちこちで新聞や雑誌が数多く発行されており、ムハマディヤ大会は、インドネシア人の耳目を集めやすかったともいえる。

一九三二年五月一日～七日、マカッサル大会は開催された。この日に向けて、インドネシアのあちこちからムハマディヤの会員たちは、一路マカッサル目ざして集まった。中央本部の幹部たちは四月二八日（火）の早朝、汽車でジョクジャを出発し、スラバヤに一泊した後、ファン・デル・ヴィーク号にてマカッサル港へ向けて出発した。船出する前、スラバヤ協力協会（Persatuan Cooperatie Soerabaia）は代表百人ほどにパンと氷のお茶をふるまった。[14] マカッサル市内では、ムハマディヤのボーイスカウト組織〝ヒツブル・ワタン（Hizboel Wathan）〟による鼓

笛隊パレードや歓迎の号砲が打ち鳴らされ、当地の新聞マカッサル通信（Pemberita Makasser）が「マカッサルで一度にこんな多くの人間が参集したことはいまだかつてない。ムハマディヤ大会の出席者がその記録を作った。」[15]と報道したように、一大イベントの観があり、大会気分はいやが上にも盛り上った。中央本部の幹部たちは、ホテルやあるいは個人の家（華僑で部屋を提供する者が多くいた）に分宿し、その他の各地の代表たちはムハマディヤ学校に泊まった。[16]

『大会記録』によると、ジョクジャの中央本部から委員長のハジ・ヒシャム[17]以下一九名の中央委員が出席した。大会を運営した南セレベスの代表と大会来賓は以下の如くである。

表2　1930年前後マカッサルで発行されていた新聞

Barisan Rakjat, 1931–1932	Berita Baroe, 1929–1941
Chau Sing, 1928–1929	Dagblad Celebes(B), 1914
Fadjar Indonesia, 1931	Njaring, 1928
Oetoesan Dagang, 1930	Pemberita Makassar, 1914–1941
Sin Hwa Po, 1934	Soeara Perdamaian, 1930–1931
Soelawesi, 1934–1935	

出所）Katalog Surat kabar, Perpustakaan Nasional, Jakarta, 1984.

⑬

表3　南セレベスの支部およびグループの代表

南セレベス	代表者名	支部・グループ名
Celebes Selatan	1. H. Abbas	Batoe–Batoe
〃	2. R. Soehitman	Maros
〃	3. J. Daeng Pagissing	Kadjang
〃	4. Zainalabidin	Madjene
〃	5. Abdulmoettalib	Singkang
〃	6. H. Andi Mori	〃
〃	7. H. Ambo Dalle	〃
〃	8. A. M. Salasi	Takkalasi
〃	9. M. Daeng Nodjeng	Labakkang
〃	10. Daeng Sitaba	Pangkadjene
〃	11. H. Haijoeng	Saleier Tambalongan
〃	12. Abdul Ghani	Rappang
〃	13. Hasim	Batoe–Batoe Sengkang
〃	14. H. Djalaloedin	Balanipa
〃	15. Abbas bin Dg。Nojeng	Paloppo
〃	16. H. Mh. Tohir	Soppengreadja
〃	17. Mh. Salim	Tjampalagin
〃	18. Abdul Latief	Belawa
〃	19. H. Moehadi	Oedjoeng LoE
〃	20. Mahmoed	Paloppo
〃	21. H. M. Kasin	Boeloekoembo
〃	22. Oesman	Bonthain
〃	23. M. Joesoep	Bontoala
〃	24. H. Mh. Ali	Pinrang
〃	25. K. H. Abdullah	Consul Makasser
〃	26. M. Salamoen	〃
〃	27. Sangadikoesoemo	〃
〃	28. S. Mansjoer Aljamanl	〃

出所）Peringatan Congres Moehammadijah ke XXI, 1932.

表4　Mengoendioengi　Congres（大会来賓）

Wakil Pemerintah：（政府代表）

1. Toean M. Hage Wakil Gouvernevr van Celeves.
2. Toean Hoofd Commissaris van Politie.
3. Toean Hoofd Recherche Politike Dienst.
4. Toean Dr. Censse advisevr voor Inlandshe zaken.

Wakil Pers：（報道代表）

1. Het Licht　2. Berita Kita　3. Berita Kita　4. Pemberita Makasser
5. Tentara Islam　6. Bintang Timoer　7. Alwafd　8. Pendoman Kemadjoean

Wakil Pesrjariktan：（団体代表）

1. Persatoean Celebes, Makasser　2. P. B. Partij Celebes　3. Sjarikat Ambon
4. Partij Celebes afd. Makasser　5. P. N. I.　6. J. I. B.
7. Siap　8. Shiong Tih Hui　9. Natipij
10. Inl. Per Irr, en Waterschappen　11. P. S. I. I.　12. Partai Indonesia
13. P. G. H. B.　14. Minhadjoessalam　15. Aradjatoes-Asna
16. B. O. W.　17. Persatoean Chaufir

Wakil perhimpoenan isteri：（女性団体代表）

1. P. P. O. B.　2. S. P. I. I.　3. Jibda　4. Islamijah

Jang ternama：（個人名）

1. Mr. Soenario　2. Nadjamoddin　3. R. M. Jahja Dipanegara
4. Han Boen Tjeng　5. Dr. Tan Tjoe Han

出所）Peringatan Congres Moehammadijah ke XXI, 1932.

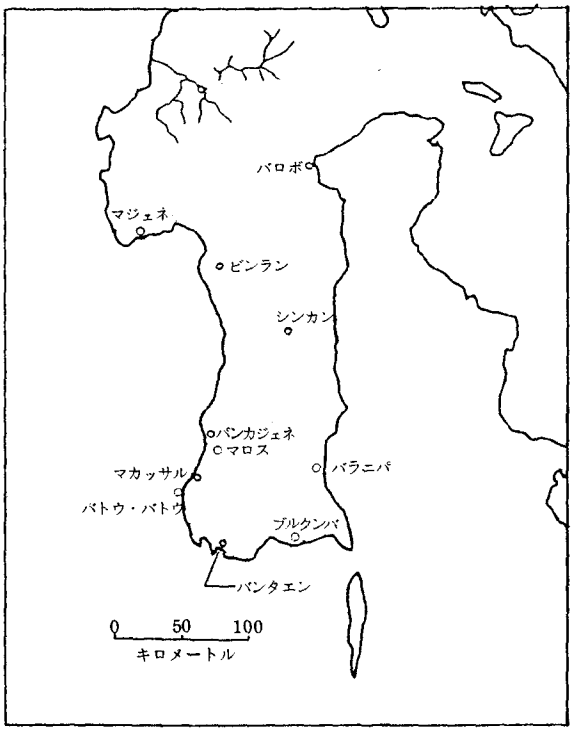


図1　南スラウェシのムハマディヤ支部およびグループ

大会の運営委員長はK・H・アブドゥルラで、彼はコンスル・マカッサル（マカッサル全権代理）の地位にあり南スラウェシのムハマディヤを代表する顔であった。イエメン出身の商人マンスール・アル・ヤマニはマカッサル支部の書記長となっており、アブドゥルラの片腕として大会運営に奔走した。参考までにパンカジェネについてみてみると、一九二七～二八年の段階ではグループであり、幹部の名簿は次の如くであった。この中で dg.（daeng ダエン）はジャワのラデンやマスと同様の南スラウェシの貴族の称号である。そして表3でのパンカジェネ代表はダエン・シタバという人物で、表5には全く出てこないので、役員の交代があったものと思われる。

大会の運営に関しては、多くの金と食料品を必要とした。それらの大半は、各地の支部よりの援助や有志からの寄付に負っており、ちなみに、運営資金の収入は五二六四・六四フローリンで、そのうちには各支部よりの援助金九〇一・九六フローリンが含まれていた。食べ物はマカッサルおよび南スラウェシよりの寄付で、米二四・二〇ピコル

（一ピコルは約六〇kg）、肉、卵、コーヒー、バナナ、野菜、香辛料等々が集められた。

尚、ムハマディヤの女性組織アイシャ（Aisjijah）⑱も同時に大会を持つわけであるが、アイシャの会場は別になっており、同時進行的に大会が運営されてゆく。

このようにして大会が開催されたわけであるが、大会運営に携わる人たちの苦労は、並大抵ではないと想像される。しかし、会員たちだけの手では実現不可能とも思われる。資金や宿舎提供の面で華僑が大きな役割りを果しているようである。ただ、ここではそのことについてはふれる余裕がない。

4　大会の決議事項

（1）　ムハマディヤの決議事項

大会において決議された事柄のその1は、『大会記録』によると、日刊紙ハリアン・アディル（Harian Adil）の発行についてであった。日刊紙は〝アディル〟と命名し、ソロで発行する。発行委員長のムルヤディ・ジョヨマルトノ以下5名で構成され、株式（四〇〇株）形式とすることが決められた。

表5　グループ・パンカジェネ（Pangkadjene）の役員

1. Sewa Moentoe	poemoeka（委員長）
2. S. Hamid	poemoeka moeda（副委員長）
3. Machmoed Mamase	djoeroe soerat（書記）
4. Hadji Masjhoed	djoeroe wang（会計）
5. Boso Bombong	djoeroe periksa（監査）
6. Mohamad Nodjeng	
7. Abdurrahaman Sisila	
8. Mannce	
9. Djamaroedin patokkong	

出所）　Soeara Moehammadijan, 1927–1928.

大会後発行されるようになったアディルの一九三二年一〇月一七日付の記事には南スラウェシに関する次のような記述が載っていた。

一九三一年九月二九日、ブルクンバのムハマディヤ発会式にハジ・アブドゥルラ（南セレベスのムハマディヤ全権代理）と書記長のマンスール・アル・ヤマニ、ムハンマド・ヌル（グループ・ガンタラン）の各氏が臨席するとともに、五〇〇人にのぼる男女が出席した。[19]

さらに二週間前のアディルには、一一月にマカッサルで開かれるPPPKI（インドネシア民族政治団体連合）の会議にスカルノ技師（Ir. Soekarno）がやって来るという報道もあった。これ以後、アディルはムハマディヤの新聞として[20]ムハマディヤの会員だけでなく、多くのイスラム教徒に貴重なニュースをもたらすようになる。

決議事項のその2は、新らしい組織としてムハマディヤの中に〝プムダ・ムハマディヤ（Pemoeda Muhammadijah ムハマディヤ青年部）〟を設けることであった。すでに〝ヒツブル・ワタン〟は青少年のボーイスカウト組織として一九一八年より設置されているが、青少年の問題を取り扱うべく、青年団体として設立される。プムダ・ムハマディヤはヒツブル・ワタンと緊密な連携を保ちながら、その活動を行なう。

プムダ・ムハマディヤはアイシヤと並んでムハマディヤの中核組織として重要性を増してゆく。特に、一九四七年にイスラム学生連盟（Perhimpunan Mahasiswa Islam）[21]が結成されてからは、プムダ・ムハマディヤのメンバーはこの団体と緊密な連帯を保ち、ムスリム学生運動のイニシアティヴを取ってゆく。

決議事項その3、ヒツブル・ワタンのためのキャンプファイアについて。儀式の時に火を汚すことはハラーム（haraam 禁忌）とされているが、有益なキャンプファイアはムバー（mubah 禁じられていない行為）である。

その4、マジュリス・タルジー（Madjlis Tardjih 法検討会議）の決定。(1) Thaharah, Zakat, Sijam,

Djinazah の本を作る。(2)女性の旅行についての統一認識：女が一人で一日以上の旅行に出かけるのはよくない。しかし、夫あるいは許婚者といっしょであればよい。そして、（一人旅が）どうしても必要であり、安全が確認されておれば、それは認められる。(3)男性が女性を教え、女性が男性を教えることは何ら差しつかえない。

このマジュリス・タルジーは一九二七年に設置され、イスラム法の中に規定されている女性の不当な地位と偏見の改善に取り組んでおり、改革派ムスリムたちの最も重視している部門の一つである。

第5の決議事項は教育についてであった。ムハマディヤは私学校条令（Toezicht Ordonnantie Particulier Onderwijs）㉒を撤回させるために運動する。

この条令は一九三二年の一〇月一日より施行する予定であり、私学校を取り締まり管理することを目的としていたために、ムハマディヤの反発を買った。前述の如く、当時たくさんのムハマディヤ学校が設立されており、学校教育がムハマディヤ運動のメインテーマであった。

その他、教育に関する討論事項として、次の様な意見が出され、採用された。

①教師の待遇改善：教師が不足しているのはその劣悪な待遇にあるからで、給料を月二五フローリンから五〇フローリンに上げること。②初等教育の段階からもっとアラビア語の学習を徹底させよ。③教師の講演会を開いて、もっと教師の質を高めること。④MULO（高等小学校）からの生徒をもっと受け入れるようにせよ。⑤Kweekschool（教員養成学校）のクラスをもっとふやし、多数の教師を養成すること。

その他の決議事項として、ムハマディヤの支部やグループをまだない所にどんどんふやしていくとともに、モスクや家々に対して、孤児院のためにもっと寄付をつのる活動をくり広げることが採択された。

（ii）　アイシャの決議事項

その1．(a)　アイシャは伝道（Tabligh）のための講習会を持ち、イスラム教の宣教者（Moeballighat）をふやしていくための活動を行なう。(b)　アイシャはイスラム宣教（Da'wah）講習会を持ち、積極的な宣教活動（Propagandis）を行ってゆく。

その2．アイシャは組織強化のため地域（Dairah）ごとにコンスル（Consul）を任命し、各地域より選出の代表者より構成されるアイシャ本部会議（Madjlis Pimpinan Aisjijah）を設ける。

その3．アイシャは公式会議のとき、インドネシア語を使用する。

その4．アイシャは子供たちの教育を重視する。なぜなら、子供たちは次代を担う世代であるからである。

その5．アイシャの教員養成学校では、イスラム教のほかに手芸や料理等の家庭科を重点的に教える。

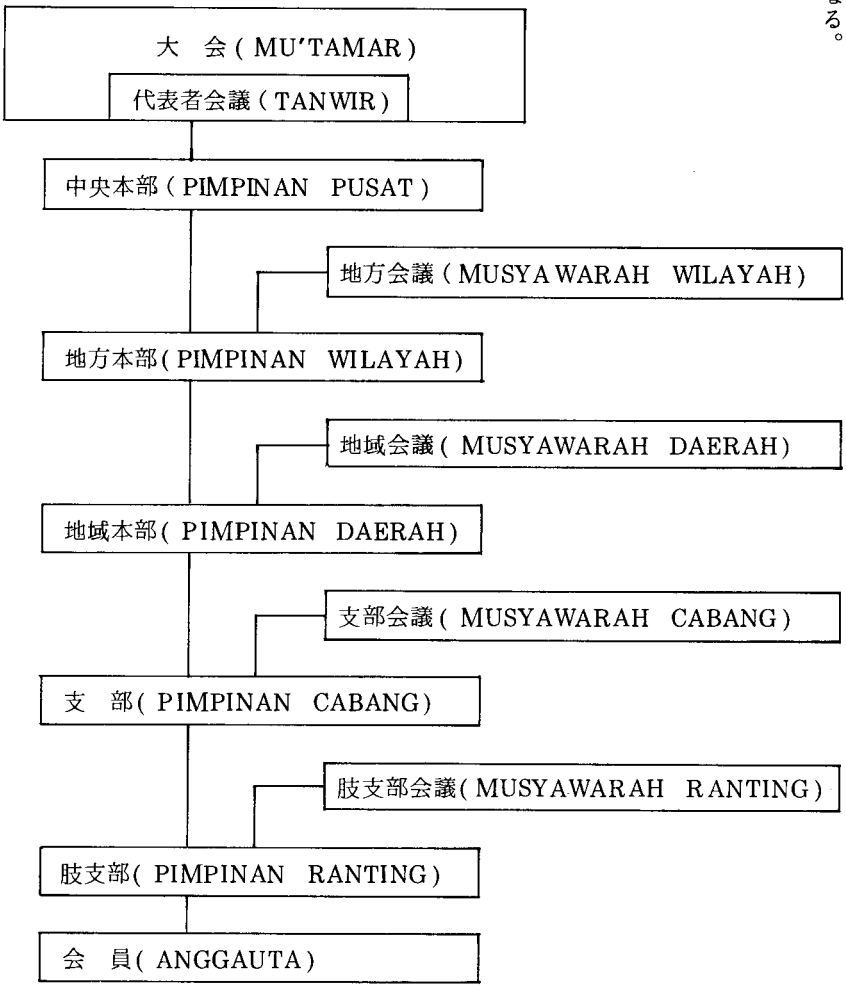
以上がアイシャの決定であった。アイシャはムハマディヤの下部組織であるが、独自の会員証を発行し、アイシャの学校や孤児院を経営するとともに、機関誌として〝Soeara Aisjijah〟[23]も発行している。アイシャはムスリム女性の啓蒙団体として地道な活動を行ってゆく。ジャワ貴族の娘カルティニ[24]は西欧思想の洗礼を受けた開明的女性で、女性解放運動の先駆者となったが、アイシャの女性たちはムスリム女性の被教育と地位向上を目ざしており、カルティニとはひとあじ違った女性解放運動のリーダーシップを取ることになる。ただ、アイシャに関する研究はまだ全くやられておらず、その究明はインドネシア女性解放運動史解明の鍵ともなると思われるので、今後の研究が待たれる。

おわりに

ムハマディヤ大会はムハマディヤの最高決定機関である。大会を頂点とするムハマディヤの組織を図示すると左の

ようになる。

図2　ムハマディヤ組織略図



出所）HASIL KEPUTUSAN MUSYAWARAH KERJA NASIONAL MUHAMMADIYAH MAJLIS PKU KE VI, PIMPINAN PUSAT MUHAMMADIYAH, 1981.)

ところで、前言したように、『会議記録』が詳細に残されており、会議の一部始終が手にとるように分るマカッサル大会は、長い大会の歴史の中でも出色と言えよう。

さて、一九二五～三五年の間は、インドネシア近・現代史の中では政治運動の沈滞した時期であったといえるが、私学校条令の施行を契機としてオランダ植民地支配に対する闘争の一つが展開される。特に、タマン・シスワ㉕の指導者キ・ハジャル・デワントロは、植民地政庁に条令を撤回させるために最も強硬に抵抗した。ムハマディヤは政治運動とは一線を画しているけれども、身近な問題の一つ私学校条令に対しては無関心ではおれなかった。デワントロは〝アディル〟に何度か寄稿し、反対意見を開陳していることからも分るごとく、この時期、ムハマディヤとタマン・シスワとはある程度の協力関係を保ったのではないかということが類推される。マカッサル大会はその契機となりえたと思う。

次に、アイシヤと並ぶムハマディヤ内の有力組織プムダ・ムハマディヤがこの大会で設置されており、ムハマディヤの組織化の徹底がこの大会でなされたと考えられよう。換言すればムハマディヤの足腰がしっかりしてきた時期にあたる。

加えて、ムハマディヤの歴史において、ジャワ中心主義であった従来の体質が改善され、この団体がインドネシア全体を網羅するイスラム改革運動の中心組織として飛躍するメルクマールとなったのがこの大会と言えるかもしれない。それは、アイシヤの会議においてインドネシア語の使用が正式に採用されたということが如実に物語っている。

ともあれ、マカッサル大会の成功は、南スラウェシのムハマディヤ会員に大きな自信を植えつけ、イスラム改革運動を加速させたことは確かなようである。この後、二四回大会はバンジャルマシン（カリマンタン）で開かれ、ムハマディヤの拡大は決定的となる。

尚、マカッサルでは一九七一年、再度、第三八回大会を開催するが、この大会については、稿を改めて考察したい。それとともに、オランダ語史料の未使用により、この大会に対するオランダ植民地政庁の対応について全くふれることができなかったが、この点については将来の課題としたい。

註

① 拙稿「南スラウェシ（セレベス）のイスラム改革運動研究（その1）―ムハマディヤ・マカッサル支部設立に関する覚え書―」『史学論叢』第一八号　昭和六三年　を参照されたい。

② ミナンカバウのムハマディヤ・スンガイバタン支部は一九二五年に設立された。この点については、Dr. Hamka, Muhammadiyah di Minangkabau, Yayasan Nurul Islam, 1974. に詳しい。

③ 拙稿「パンチャ・シラ（五原則）とムハマディヤー大会―第四一回ムハマディヤー大会に出席して―」『史学研究』一七号（一九八七年三月二〇日）を参照されたい。

④ カハル・ムザッカールについては、"Professor Haji [Abdul] Kahar Muzakkir and the devolopment of Muslim reformist movement in Indoneesia," in Benedict R. O'G. Anderson, Mitsuo Nakamura, and Mohammad Slamet, Religion and Social Ethos in Indonesia, Centre of Southeast Asian Studies, Melbourne, Monash University, 1977. がある。

⑤ 註①でふれている。

⑥ 例えば、一九三八年マランで開かれた第二七回大会の"Buah Kongres"などは、わずか八ページの粗末なガリ版刷りで

ある。

⑦ Peringatan Congres Muhammadijah ke XXI, Hoofd Bestuur Moehammadijah, 1932.

⑧ 土屋健治「インドネシアの社会統合―フロンティア空間についての覚え書き―『アジアにおける国民統合―歴史・文化・国際関係』 東京大学出版会 一九八八年 一六六頁。

⑨ 同右書同頁。

⑩ Peringatan Congres Moehammadijah ke XXI, op. cit., P. 6.

⑪ Soara Moehammadijah, 1932, P. 991.

⑫ Taufik Abdullah, Schools and Politics : The Kaum Muda Movement in West Sumatra (1927–1933), Cornell University, 1971. を見よ。

⑬ この書は一八一〇―一九八四年までにインドネシアで発行された新聞のカタログである。

⑭ Peringatan Congres Moehammadijah ke XXI, op. cit., P. 12.

⑮ Ibid., P. 15.

⑯ Ibid., PP. 13–14.

⑰ ハジ・ヒシャムは一九三二年から三六年まで中央本部委員長をつとめた。

⑱ アイシャは一九一七年に設立された。

⑲ Adil, 17 October, 1932.

⑳ 現在のアディルは雑誌であり、月の一日と一五日に発行されている。

㉑ Drs. Agussalim Sitompul, Sejarah Perjuangan Himpunan Mahasiswa Islam (Th. 1947–1975), PT

Bina Ilmu, Surabaya, 1976. を参照されたい。

㉒ Dr. S. L. van der Wal, Het onderwijsbeleid in Nederlands-Indie 1900-1940, J. B. Wolters Groningen, 1963. に詳しい。

㉓ スアラ・アイシャは一九二五年から現在まで発行されている。

㉔ カルティニの教育観については、戸田金一「オランダの言語政策とその反響」『近代アジア教育史（上）』所収、多賀秋五郎編著　岩崎学術出版社　一九六九年　を見よ。

㉕ 土屋健治『インドネシア民族主義研究ータマン・シスワの成立と展開ー』　創文社　昭和五七年　の第九章に詳しい。

付記

本稿は昭和六〇年度文部省科学研究費海外学術調査「インドネシア宗教社会の史的実地調査」（責任者今永清二広島大学教授）の成果報告の一部を成すものである。執筆にあたり今永教授の御指導を受けた。記して感謝の意を表したい。